虚實の境

土田龍太郎

變易の刹那ごとに顯るる造化の實相の重く尊きはさることなれども、風雅の道の奥をさらに究めむとせば、目近にありあひたる實を認むるのみにてはいまだかたほなるべし。よしや虚ごとなりとてもむげに斥くべきにあらず。實と虚ごととふたつながら包ね攝むる勝義の眞實に思ひ至らでやはあらむ。實のみならで虚ごとにもよりてこそすなはち究境のさかひに入りぬべけれ。

風雅者のいとなみくさぐさあり。造化の示す刹那の實相をただあるがままに寫すのみに限るべからず。蕉翁の説けりしごとく、つねに私意を離れであるべからざるはさることなれども、私意を離れつつしかも造化に對ひゐて造化に挑み造化と戯るるやうなることまたあるまじきにもあらず。

近き世の歌人俳人、あるいは寫生を説きまたは實相觀入を唱へつつ、むねと事物の實相を寫さむと努むるゆゑに、いはゆる寫實主義の埒をえ超えざるが如くに見ゆれば、あかずおぼゆることこよなし。

日々のあれこれの事業に携るほどは、實と虚ごととたとへば水と油のごとくにてあひ容れがたければ、そのけぢめいささかもまぎらはすまじきことげに云はでもしるかるべし。さはれひとたび世俗を離れ風雅のかたによせて考ふるに、虚ごととをとほしてはじめて顯るる實なるものなきにあるざることおのづから悟りうべし。このことわりいとも神妙にてなまなかの口説もてはさらに解きがたけれども、詩歌文章の道を進まむもの心にしかとどめではあるべからず。

芭蕉翁かつて

虚に居て實を行ふべし。實に居て虚にあそぶ事はかたし。

と説きたるはいかなる意ならむ。とみには明らめがたけれども、かの翁風雅のはてを究めむとて、實と虚のあはひのいとも危きさかひに遊びたりけむこと思ひやるにたへたり。

虚を實に飜すくすしきわざ、これぞ風雅の道の要なるべき。

（令和六年十月二十四日受附）